

Childhood Studies (学際的「子ども期」研究) への接近 —子ども・子ども期をめぐる近代的パラダイムの超克—

首藤 美香子・須川 公央

研究実績の概要：

本特定課題研究のメインテーマである学際的「子ども期」研究（Childhood Studies、以下CSとする）の最新動向を調査・研究するにあたり、2018年度は主に以下の3つのサブテーマからCSへのアプローチを試みた。

（1）子ども期≡発達期という子ども観の検証

20世紀以降における子ども研究の主流を占めてきた発達心理学の方法論や理論的知見、さらにはこうした知見に基づいた立案された教育・福祉政策の批判的検証は、英米を始めとする数多くのCS研究者たちによってなされてきたところである。例えば、子どもの直接観察によって導き出された発達の「事実」が、「子どもはいかに育つべきか」、「子どもはかく育つべきである」という「当為」へとすり替わってしまう自然主義的誤謬や素朴実証主義的な研究データに基づく発達の標準化・規範化といった問題は、CSの中心的テーマの一つとして繰り返し論じられてきた。本研究では、“Antidevelopmental Psychology”を標榜する① Burman, Erica *Deconstructing Developmental Psychology*, “2nd edition Routledge 2008、② Rose, Nikolas, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self* 2nd edition Free Association Books 1999、などを精読しつつ、上記の問題について整理を試みた。

（2）感情史の開拓

P・アリエスを嚆矢とする子どもの心性史研究は、近年、A. コルバンが開拓した感性（sensibility）

の歴史から感情（emotion）史へと移り、米国で一大発展を遂げている。子どもの〈喜怒哀楽〉、〈罪悪感と恥辱感〉、〈怒りと攻撃性〉、〈嫉妬と羨望〉、〈自尊心〉、〈幸福感〉といった感情の徹底操作（manipulate）が保育・教育の現場で日常的になされている現状を鑑みれば、「感情」は相互主観的な保育・教育関係の実相と特定の保育・教育実践の背後に潜む保育者（教育者）の観念を浮き彫りにする重要な切り口の一つとなり得よう。本テーマに関しては、Peter N. Stearns and Susan Matt, *The History of Emotions Series*. Univ of Illinois Press 2013、等の文献を精緻に読み解く作業を通して、保育・教育学における感情史の構築に一定の方向性を見出すことが出来た。

（3）精神分析的子ども観・発達観の解明

（1）・（2）と関わって、大人と子どもの関係性における感情、特に「快・不快」やそれらの相克的な感情体験を超克することにより、個体発達は促進されるとする近代特有の発達観を再検討するにあたり、フロイトとその後継者たちが提起した発達理論と、それが日常の子育てや教育学の理念と方法に与えた影響力の大きさは、無視できないものがある。とりわけ保育・教育学や発達理論に与えた精神分析学の今日的意義を探るにあたり、CSが誕生し展開する時期と重なる1990年代以降の欧米の教育書の子どもや発達にかかわる言説分析に焦点を絞りつつ、近年、脳科学の知見を積極的に導入することで目覚ましい発展を遂げつつある精神分析学の発達論と子ども観の輪郭を明らかにすることは、近代パラダイムの超克という

本研究の核心に迫る課題である。本テーマに関しては、精神分析家の中でも特に発達理論の構築に多大なる貢献を果たしたE・H・エリクソンの未公刊資料を発掘するべく、米国イエール大学 Manuscripts and Archives および米国議会図書館 (Library of Congress) にて、資料調査を実施した。本調査を通して、エリクソンの主要な研究成果の一つである Psychosocial Development Theory (いわゆる Epigenetic Chart) の基となった Psychosexual Development Theory の構想過程が記された草稿 (“Notes on Freudian Theory”: 発表年不明) の発掘など、前期エリクソン理論の一端を解明するうえで欠かせない資料を入手することが出来た。本資料については、現在、読解中であり、いずれ研究論文としてまとめる予定である。なお、本テーマと関わって、精神分析的教育学の概説書である Britzman, D. P. *Freud and Education*. Routledge.2011、を現在訳出中 (2020 年刊行予定) であることも併せて付記しておきたい。